

## 高機能広汎性発達障害児への支援

—「教師のためのセミナー」を通じて教育側の理解と効果的指導体制を模索する—

植原淳子 (多摩・高機能PDD親の会)

川崎葉子・村上公子(都立多摩療育園)・水野薫(福島大学)

横田圭司・高柳みずほ・(ながやまメンタルクリニック)

猪野民子・坂井和子 (むさしの発達クリニック準備室)

### <要旨>

東京多摩地区に居住する小学1年生以上の就学児で、「高機能広汎性発達障害」と診断を受けた子供を持つ親で構成されるのが【多摩・高機能PDD親の会】である。情報交換や知識を深めるための勉強会・講演会、子供を交えての交流会などを活動の柱にしているが、子供たちの担任の教師を対象に、この障害に対する理解を促進し教育現場におけるより効果的な指導・さらには支援体制を充実してもらうことを目的に「教師のためのセミナー」を開催している。平成13年8月にスタートし、過去9回開催。のべ240名の教師が参加した。一方、このセミナーに参加しない教師も含め、すべての学校関係者にアンケートを実施。①この障害に対する教師の認識、経験 ②生徒の特性、それに対応する教師の工夫 ③教師が必要とする協力体制もしくは支援体制などを検証した。

### <キーワード>

高機能広汎性発達障害、教師のためのセミナー、児童生徒の特性と対処、教育現場の現状

#### 【はじめに】

高機能 PDD の児童・生徒は知的にあまり大きな遅れがないことを理由に通常級だけに在籍することが多いが、彼らの特性である自閉症的な要素(後述)のために、教師がその指導も含めクラス運営に困難を感じることは少なくない。これは、通常学級の担任に限らず、通級指導学級や心障学級の教師、さらには養護学校の教師たちにも同様の現象である。特に昨今は、これらの学級に高機能 PDD 児が急増しており、それまで多数を占めていた非高機能者とは明らかに異なる彼らの特徴に戸惑いを隠せない教師も多い。

そこで、担任教師を始めとする教育現場の関係者に、まずは、この障害そのものに関する理解を深めてもらい、さらに、実践的な指導のノウハウを検討し、より効果的な支援体制を模索してもらうことを目的に、「教師のためのセミナー」を開催することとした。

また、このセミナーには参加できない教師にアンケートを実施。クラス運営に置ける実態を列挙してもらい、高機能 PDD 児を取り巻く困難な状況、さらに今後必要とされる支援体制のあり方を検証した。

#### 【高機能広汎性発達障害とは】

知的に高いとはいえ、自閉症の三つの主症状(社会性の障害・コミュニケーションの障害・想像力の障害)を含め、自閉症に特徴的に認められる特性をすべて持っている。「彼らが得意なことは、繰り返しやこだわること、映像的記憶、車や電車の種類・時刻表などカタログ的知識、ファンタジーにふけることであり、不得手なことは、新しい場面、先を読むこと、文脈の理解、人に合わせること、気持ちを 읽むこと、二つのことを同時にすること、あいまいなまま全体を把握することなどである。」(\*) 幼児期からすでに集団行動が取れず、指示に従わずに自己の興味のみで没頭する傾向が強いが、学童期になると、問題が大きくなりがちで、いじめの標的になることも多い。高学年になるとトラブルが軽減する代わりに自己否定が始まり、被害妄想的なパニックで不適応症状がエスカレートすることも少なくない。実は「高機能者とは自己を悩む自閉症である。」(\*)

一般的には大きく二つのタイプに分けられる。受動型はパニックが少なく、教室でのトラブルも少ないが、当てられると授業に無関係な話をしてしまう。おとなしい友人とは交わることができるが、自ら友人を求めることもなく孤立を苦にしない。一方、積極奇異型は、多動を伴うことが多く集団行動が著し

く苦手な離席飛び出しを繰り返す。時には攻撃的にもなり、周囲の反応を無視して人が嫌がることを一方的にしゃべり続ける。

会話によるやり取りよりも文字や絵による視覚的な指示の方が通りがよい。会話による双方向の交流は、相手の顔の表情やことばのニュアンスなどを読み取るのが苦手な彼らにとっては、苦痛である。また、慣れない場所、初めての場所あるいは突発的なスケジュールの変更が苦手な、大声を上げるなどのパニックを起こすことが多い。事前に予告することが効果的である。

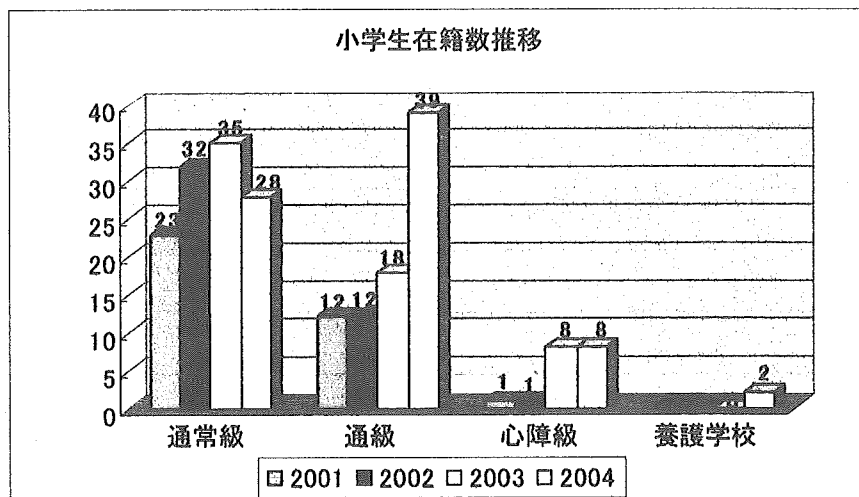
彼らの特徴を正確に把握し、場面ごとに的確な対応をしていけば、学校生活のみならず一般の社会生活に十分適応していくことが可能であり、穏やかに暮らしていくことができると考えられる。

### 【親の会の状況】

当会は98年(平成10年)秋に発足したが当時会員はわずか9名であった。自閉的な特徴はあるものの知的に大きな遅れがない、もしくは比較的高いIQを持つ子供を持つ親たちは、障害に関する知識も情

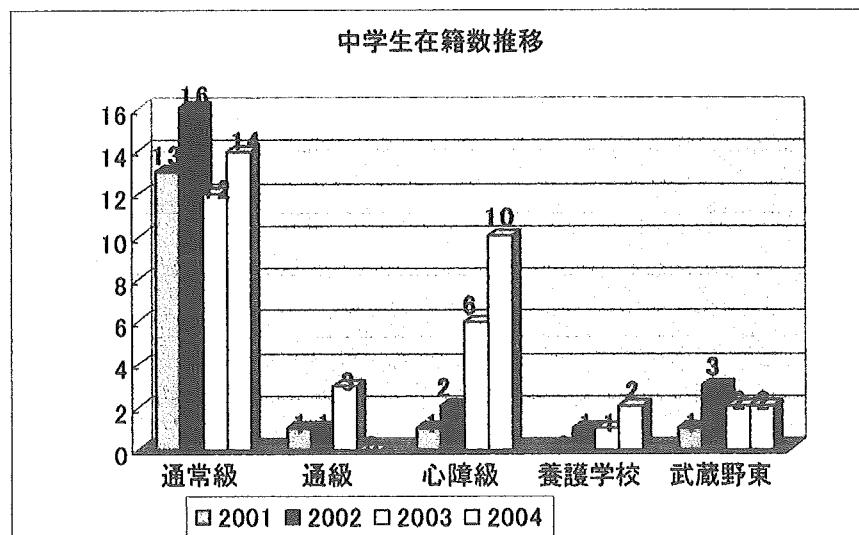
報もなく、将来に対する不安を抱えながら途方にくれていた。都立多摩療育園の川崎医師が、新患者の中に占めるこの障害の急増を痛感し、数名に声をかけて一同に会した。その後、入会の資格を多摩地区に居住する小学1年生以上の児童・生徒に絞っているにもかかわらず、まさに、うなぎのぼりに会員数が増えて行き、現在では160名以上となっている。当初は、通常学級にのみ在籍している児童・生徒がほとんどであったが、最近では指導学級に通級する、心障学級に在籍する、養護学校に在籍するケースが多くなってきた。

一口に高機能広汎性発達障害と言っても個人差があり、IQ70をギリギリ超える者もいれば120以上の者もいる。前述の受動型もいれば、積極奇異型もいる。どのクラス、あるいはどの学校に通うかは、一概に障害のタイプとは一致せず、その時の親の考え、友人環境、そして教師をはじめとする学校における受け入れもしくは支援体制による。しかしながらこの障害を有する子供の数の急増を受けて、学校側にも多様化が求められていることは事実であろう。



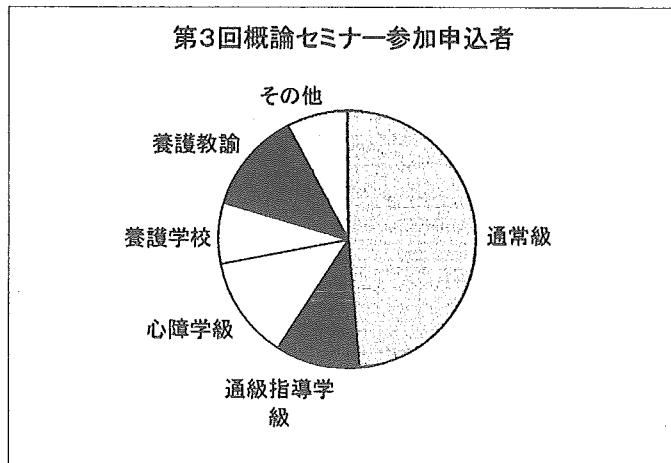
左のグラフは、過去4年間の4月時点での会員の在籍級の推移を示している。小学生の通級が劇的に増えているのが顕著である。

中学では通級制度を持たない市町村が多いため、心障学級在籍が増える。毎年、6年生を持つ保護者たちは、中学校の選択に悩み続けるが、我が子が特別な支援を必要としている、という意識を強く持つことで、この選択を決定するのである。



### 【教師のためのセミナー】

高機能広汎性発達障害を持つ子供の数の急増に、学校現場での認知が追いつかない現状を鑑みて、当会では、教師を対象に、障害に対する理解を深めるセミナーを開催することとなった。平成13年8月に第1回セミナーを開催してから、現在に至るまで



9回のセミナーを実施している。のべで240名弱の教師が参加しているが、特筆すべきなのは、通常級の教師対象と銘打ったにも関わらず、通級指導学級・心障級・養護学校の教師が参加を希望したこと。さらに幼稚園の教諭の参加希望が非常に強いこと。学童クラブや塾など放課後に子供と接する指導者の参加があったことなどである。グラフは、平成14年6月のセミナー参加希望者39名の内訳である。

「その他」の内訳は、校長・相談学級・通園施設となっている。

参加希望者が多方面に渡っているのは、高機能広汎性障害を有する児童・生徒がいかに多く学校現場にいるかを物語っており、さらに、彼らの指導に際して教育現場でいかに戸惑いが多いのかを示している。

### 【セミナーの評価】

セミナーでは、まず医師よりこの障害のメカニズムに関してレクチャーがあり、その特徴が説明される。続いて教育心理の専門家により現場における実践的な指導ノウハウが示される。

参加者に事後アンケートを取り始めたのは、第5回各論セミナーからであるが、概ね好評で、理解が深まり、実践面で参考になったとの声が多い。

\*いくつかのコメントから・

- 障害の特性が理解できたし、クラスのなかでの対応について細かな話が聞けた。
- 授業中の働きかけ方において言葉とイメージを結びつけて行くことの重要性を勉強できた。
- 皮肉やユーモアが通じなかった理由がよくわかった。ありのままをわかりやすく、でも相手を傷つけないで指導していきたい。
- 興奮した時は場所を移し、人を変えて指導にあたる。

この障害に対する大まかな知識を入手していた教師には、次に、個別のケースを設定してより具体的に検討する各論セミナーへの参加を促している。テーマとしては、立ち歩き、独語、不用意な発言などで「授業に参加できない子」。次に、その独特の特性から2次的に起こる睡眠障害・チック・被害者意識などの「不適応」。具体的な問題行動に関する実践的な指導のワークショップを試みた。

ただし、セミナーに参加するこれらの教師は、自分の子供の障害をはっきりと認知した親から呼びか

けられ、自身も問題を明確に認識した状態にあり、多少バイアスがかかっていると言えるかもしれない。さらに、特筆すべきこととして、彼らから挙げられるコメントとして顕著なのが、明らかにこの障害を有していると思われる子供が他にも複数存在しているが、多くは、その保護者が障害を認知しておらず、適切な対応がなおざりにされているという現状であった。

都合でセミナーに参加できない教師も多く、事後アンケートの回答やコメント・評価が、数少ない教師の個人的な意識や私見などの側面が入っている事を考慮すると、もっと広い範囲の教師に対して調査をかける必要を感じた。そこで、高校生以下の子供の学校関係者（教師、養護教諭）全員に、アンケートを実施することとなった。

### 【全教師対象のアンケート】

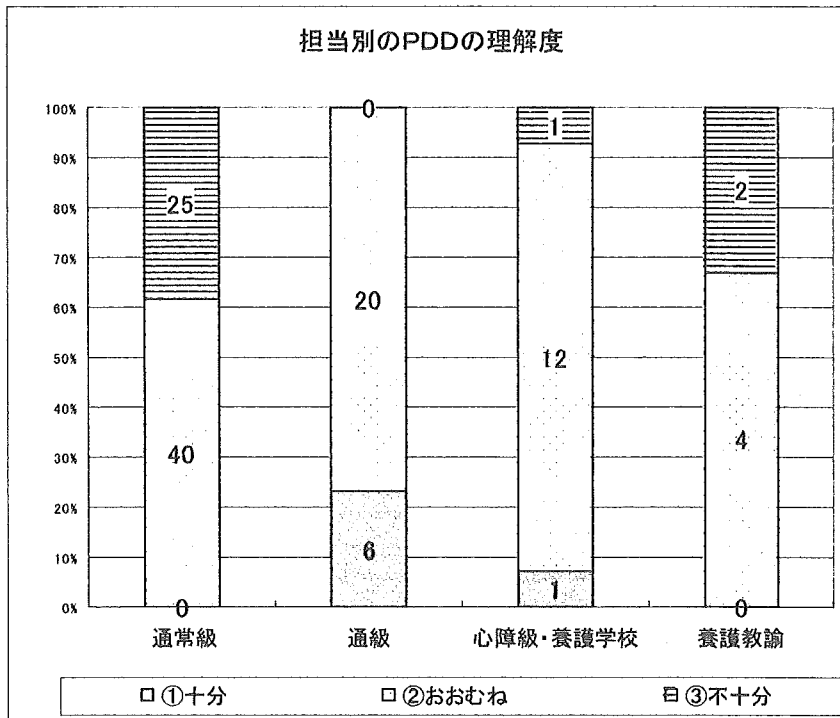
平成16年1月実施・105校138名の教師にアンケート送付。

\*アンケートの実施に当たって

- ①学校側に告知していない家庭があることを考慮し、まずは会員に送付の是非を確認。
- ②親の会の子供に関するのみの記述に限定。
- ③教師の立場は、担任か養護教諭のどちらか。

\*回収率：80.7%（138名中102名から回答）

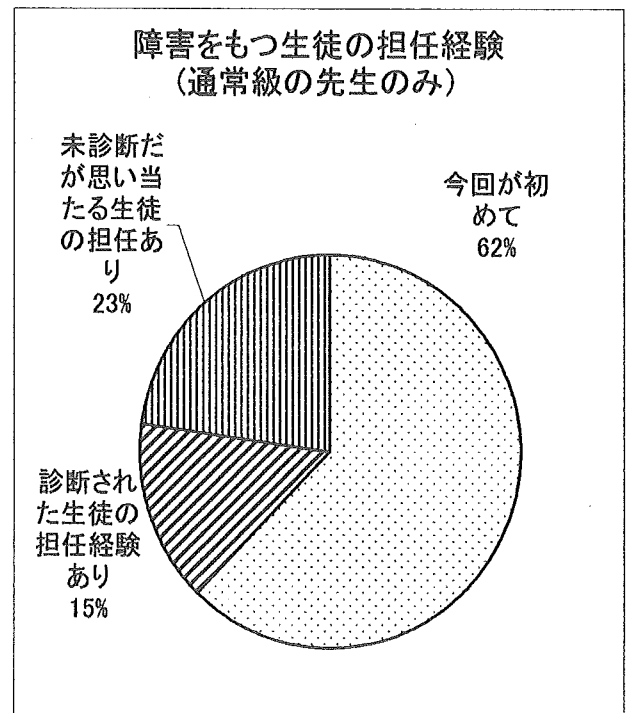
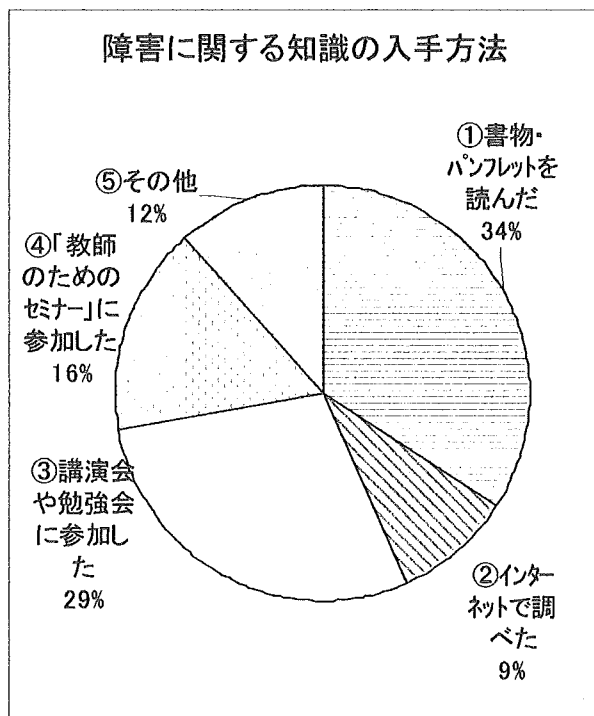
<理解の度合い・経験・知識入手>



「PDD という障害をどの程度理解しているか」という質問に対する回答として、通常学級の教師の理解度と通級指導学級や心障級の教師との間に差があるのは、当然の結果であろう。

その知識をどこから得るかに関しては、書物やインターネットよりも、講演会やセミナーなどのような顔が見え、より具体的な話が聞けるような機会を多く求められていることがわかる。

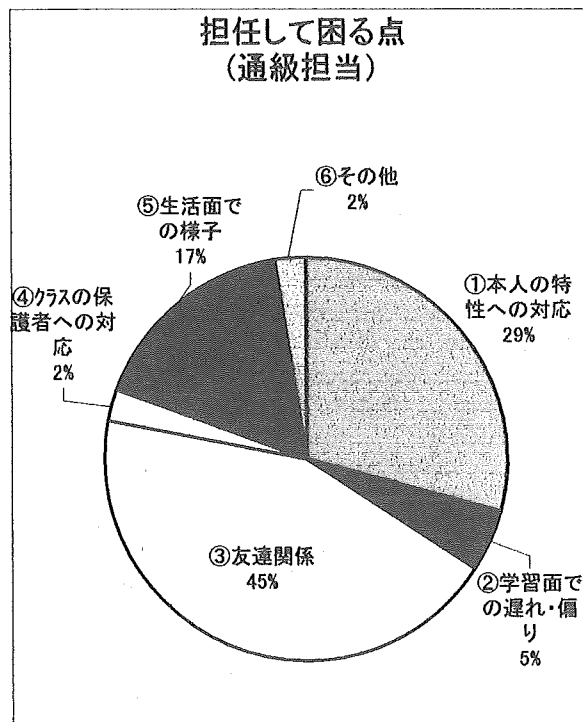
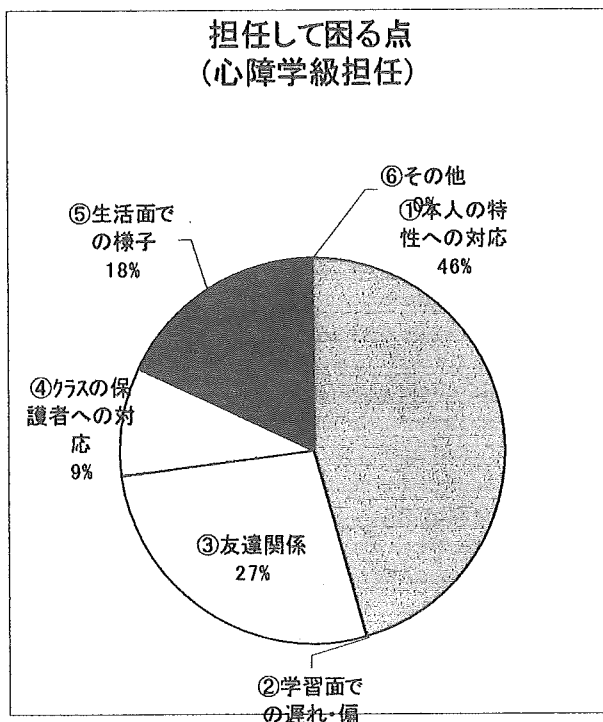
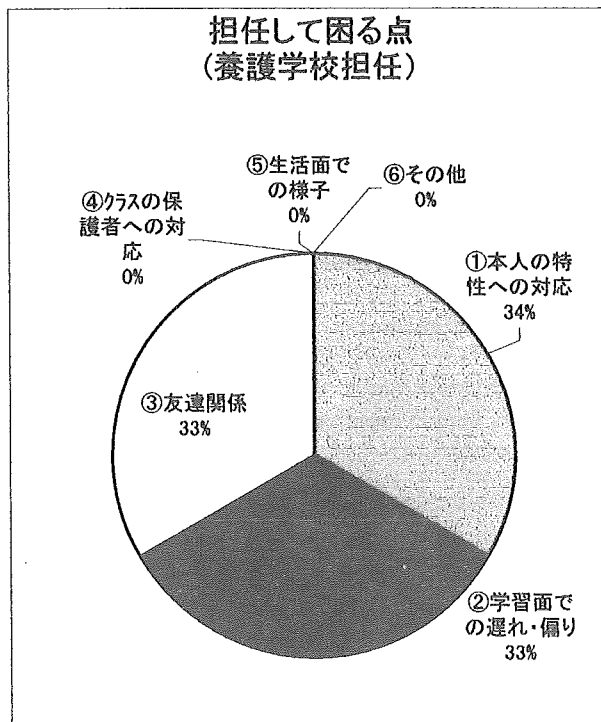
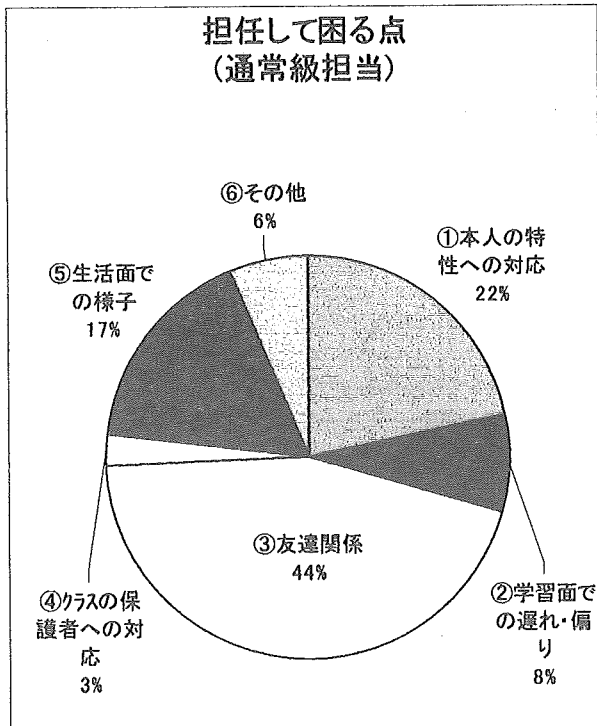
通常級の教師のみに過去の担任経験を問うてみたが6割が今回が初めてである、との回答。残り4割は以前にも担任したことがある、と回答している。



<一番困る点>

どのクラスにおいても、教師は、彼らの「友達関係」において困難を感じていることがよくわかる。本人がどのような友達関係を求めているのかは不明であるにしても、友たちとの関係の作り方や距離の持ち方が下手であることを教師として気にしている。

特性としてのコミュニケーションの障害やこだわりの強さなども、クラス運営に置いては困難の原因となっている。



#### <具体的な特性>

高機能PDDの特性 58 項目を挙げ、本人の言動が目立つものを選択してもらった。複数回答可としたので多いものから順に列挙する。

	通常学級	通級指導学級	心障学級・養護学校
1位	友達との関係の作り方が下手である。	場面や相手の感情、状況を理解しないで話すことがある。	口数が多すぎる。
2位	友達と一緒に遊ぶのが苦手である。	不用意な発言、場面や状況に関係ない発言をする。	場面や相手の感情、状況を理解しないで話すことがある。

	通常学級	通級指導学級	心障学級・養護学校
3位	不用意な発言、場面や状況に関係ない発言をする。	友達との関係の作り方が下手である。	自分の考えや気持ちを発表や作文で表現することが苦手
4位	場面や相手の感情、状況を理解しないで話することがある。	自分の考えや気持ちを発表や作文で表現することが苦手	漢字や計算は得意だが、読解や文章題は苦手である。
5位	自分が非難されると過剰に反応する。	漢字や計算は得意だが、読解や文章題は苦手である。	会話が一方的だったり、応答にならないことが多い。
6位	新しいことに手を出したがる。	会話が一方的だったり、応答にならないことが多い。	不用意な発言、場面や状況に関係ない発言をする。
7位	ちょっとしたことで舞い上がる。	友達と一緒に遊ぶのが苦手である。	慣用表現がわからず、字義通りに受け止めてしまう。
8位	電車・歴史など特別な趣味、特定の物に対する偏った強い興味	時間割など日課の変更が苦手、不安。	電車・歴史など特別な趣味、特定の物に対する偏った強い興味
9位	時間割など日課の変更が苦手、不安。	自分が非難されると過剰に反応する。	100点を取ることや競争に勝つことにこだわる。
10位	会話が一方的だったり、応答にならないことが多い。	不注意で先生の話聞き漏らす。	具体的な指示がないと動けない。

### <特に力を入れて工夫している指導>

#### [場面、状況に関係ない発言]

⇒その場で、あるいは後で個別に説明

#### [友達作りが下手]

⇒安定している穏やかな口調の児童と同じ班にする・休み時間には教員と一緒に遊ぶ

#### [自分を表現するのが苦手]

⇒自信をつけさせるため、発表したことを認め、励ます場面を作る・授業で挙手したら指名する。

#### [時間割の変更が苦手]

⇒変更はなるべく避け、事前に予告・保護者に予定表を渡しておく

しかし全体として指導になんらかの具体的な策を講じているのは数としては少なく、また「効果があった」とする回答はさらに少なかった。特性は認識してはいるが、具体的な指導方針にいたってはまた試行錯誤の状況であることがうかがわれる。これについては、通常の学級の78.5%で[クラス内に要配慮の児童生徒が他にも複数いる]と回答していることから、指導における難しい現状が推察された。

#### <長所>

教師たちは、彼らの良い点に関してもしっかりと把握しており、十分に認めていることがわかる。

	通常学級	通級指導学級	心障学級・養護学校
素直である。	41 (65.5%)	19 (70.4%)	9 (71.4%)
真面目である。	36 (60.2%)	17 (63.0%)	10 (50.0%)
努力家である。	24 (35.4%)	7 (25.9%)	7 (57.1%)
嘘をつかない。	34 (47.8%)	10 (37.0%)	8 (42.9%)

教師がこれらの生徒に関して相談する相手は、本人の保護者が最も多い。(通常級 98.1%・通級 74.1%・心障養護 71.4%) 続いて、校内外の教師や専門家と続く。さらにその保護者との共通認識が取れているとする回答が多く、十分な連携を取りながら指導がなされていることがうかがわれた。

#### <通常の学級における支援体制の有無>

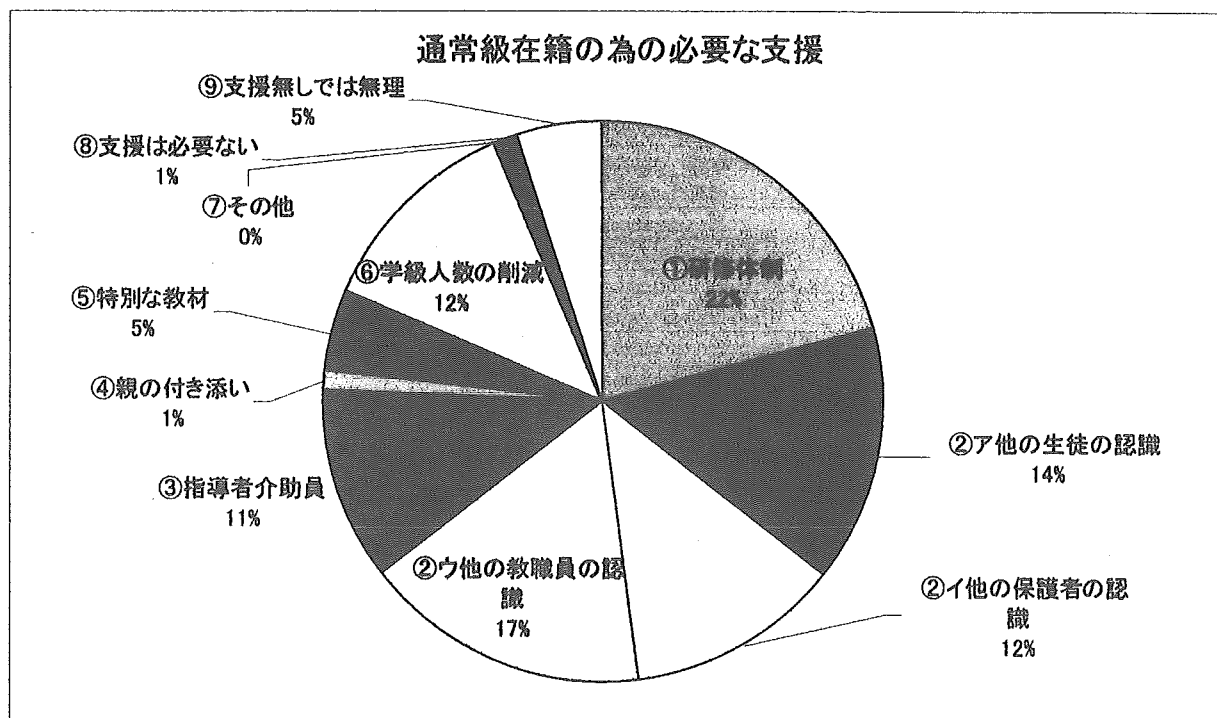
56.9%が[有る]と回答。具体的には[アドバイザー・スタッフなど定数外の教職員や学生](35.1%) [管理職](29.7%) [スクールカウンセラー](29.7%) となる。

#### <今後必要な支援体制>については次頁のグラフに示したが、

教師が求める支援は、顔の見える研修を筆頭に、PDDに関する知識・情報である。現状は保護者との連携を取りながら校内教師の支援も得ての指導であるが、他の教師や認識が希薄な保護者も含めた周囲の正しい理解と協力が必要と考えている。

支援体制があるのは過半数だが、管理職も動員される『総動員』体制でシステムに未熟さがある。学校には当会の子供たちも含めて要配慮児が1クラスに複数存在し、試行錯誤しながらの教育が行われている。

### 通常級在籍の為の必要な支援



#### 【終わりに】

高機能 PDD の児童・生徒は「知的に大きな遅れがなく、授業中のスタディスキルを身に付けていさえすればOK」というものではない。むしろ学習以外の場面での困難に立ち向かう必要があり、教室内外での場面に応じた支援が求められる。

どの学級にも存在している特別な支援を必要としている子どもたちは、的確な対応や関わり方で、本来持っている力を十分に発揮できるのである。そのためにも学校関係者たちの正しい理解とサポートを期待したい。当会の「教師のためのセミナー」を利用していただければ嬉しい限りであり、今後も継続していく予定である。

と同時に、保護者も家庭において正しい支援を行なう必要がある。まずは、我が子の障害を正確に認知する。(保護者の育て方が原因ではなく、脳やその機能の障害によるものである。) さらに、学校関係者と共通理解を持ち、十分に話し合った上で、連携を図り、家庭でも的確な指導をすることが大切である。

やがて就学を終え、就労自立していく青年期を迎えた際に、時には反社会的な不適応行動を起こすことがないように、そして自分の居場所を見つけることができるように、学齢期での、適切な支援を切望する次第である。

#### 【参考文献】

- \*杉山登志郎 編著 2002  
「アスペルガー症候群と高機能自閉症の理解とサポート」(学研)
- \*國分康孝・國分久子 監修 2003  
月森久江・朝日滋也・岸田優代 編集  
「教室で行う特別支援教育」(図書文化)